⑫みんなの交流館 ならはCANvas（キャンバス）建築事業

受賞機関　福島県 双葉郡 楢葉町

キーワード　復興の拠り所・象徴、住民参加、地域交流

全建賞審査委員会の評価ポイント

東日本大震災の影響で全町避難となった福島県楢葉町において、住民みんなでつくることで、皆に愛される復興の象徴となることを目指した「ならは交流館」の建設にあたっての取組み。９回に及ぶ住民ワークショップやワークショップ後の「交流館だより」の配布により、町民の意向を丁寧に汲み取り、施設設計に反映したことで、東日本大震災からの町民の復興の拠り所・象徴となる施設となっている点が評価された。

1. はじめに

楢葉町は福島県浜通り地方の中軸に位置し、西は阿武隈高地、東には太平洋が広がる自然豊かな地域である。

しかし、2011年３月11日の東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所の事故により全町民が避難を余儀なくされ、コミュニティの維持が非常に難しい状態となった。避難から約４年半が経過した2015年９月５日には国による避難指示が解除され、今日では、人口の54％を超える約3,700人が町内で生活をおくっており、原発事故収束作業の前線基地とされていた国内最高水準のサッカートレーニング施設「Ｊヴィレッジ」や天神岬スポーツ公園、道の駅などの観光施設等も再開するなど、町内には活気が戻りつつある。

本事業は、町の復興の新拠点として整備されているコンパクトタウン「笑（えみ）ふるタウン」内に人の交流を生む“目に見えない復興”を象徴する場を目指して地域交流館を建設した事業である。

2. 事業の概要

本施設の一番の特徴は、楢葉町に関わる町内外の人々が構想を練り、設計を進めた点である。計９回のワークショップでは、ふるさとに戻って暮らす人、やむなく離れた人、新たに入ってきた人など各々の立場を超えて交流できる施設であってほしいという願いが語られた。

この想いは、施設のロゴに使われた三原色と、それらが混り合うことでできるキャンバスの白に表現され、CANvasという名前も、利用する人それぞれが主体的に関わり、創っていく＝キャンバスに絵や色彩を加えていくような施設であってほしいという期待から一般公募で名付けられた。また、大文字のCANにはこの施設の可能性や、使う人の「できる」を叶える場にしたいという想いが込められた。

WSの様子　機能・デザイン・管理・使い方など沢山の意見が出ました

交流館ロゴ

ワークショップ後には、内容をまとめた広報誌“交流館だより”を全戸配布し、町民意向を丁寧にくみ取り施設設計を行った。建物は大きな木製梁を格子状に幾重にも積み重ねた特殊な屋根をデザインし、郷土意識が複雑化していた時期に一つの大きな家を想起させる、町の復興の象徴となる施設を実現した。四周には「木製大開口サッシュ」を採用し、建物周囲の広場や太陽光パネル付のパーゴラと連携活用・相乗効果を産む計画とした。また、津波被災家屋の資材も活用し、次の世代に歴史や震災についても伝えることができる。まさに、震災があったからこそ、みんなで造ることができた施設となった。

交流館の外観　南西の壁は開閉可能で広場と一体的な利用が可能

3. 事業の成果

開館後、町内外から人が集い、独自の利用が展開され、利用者発の企画も実施している。開放的な設計や交流を生む工夫により、世代や立場を超えた日常的な交流が生まれ、町民の「こころの復興」を後押ししている。

4. おわりに

町民の想いをもとに設計された施設のオープンは、ゴールではなく“はじまり”。地域を越え、世代を超え愛される施設を目指している。いつ訪れても、新たな出会い、発見、変化、余白がある。たくさんの可能性を秘めた施設ですので、是非お越しください。

賛助会員　（有）都市建築設計集団／UAPP